

日本近代文学における、作家と作品 との関係 「道草」と「暗夜行路」

マイケル・ジョンソン

志賀直哉野「暗夜行路」と夏目漱石の「道草」という小説は両方、ある程度、自伝的な小説である。そう言っても、作家の本当の経験が書かれているわけではないけど、大体両方の小説の主人公は作家自身に基づいている。

「道草」の方がはるかに自伝的だと思うけれど、小説の期間はすごく短いので、健三はその時の夏目と同じ性格というわけではないであろう。

「暗夜行路」の中にも作り事というのはけっこうある。志賀にとってお父さんはだれかという疑問はなかったし、志賀のお兄さんは志賀の誕生の前死んでしまったし、時任謙作を育てたお栄という人物は事実の人にに基づいていないのである。しかしながら、志賀は主人公と深く関わっているに違いないであろう。それに、自伝小説と言ったら、作家の希望や恐怖や空想などが書いてある意味であると思う。

どうしてこの二人の作家は自伝的な小説を書いたであろうか。たぶん自分の経験を使いながら、書いたら、読者を感動させる力が強くなるかも知れない。夏目は「道草」で自分の人間関係を描写した。それに、作家の寂しさがよく分かる。夏目の自伝的な小説は「道草」しかないけれど、他の小説の主人公も夏目自身の寂しさと絶望を表すと思う。「道草」の末尾には主人公の妻は「じゃどうすれば本当に片付くんです。」と言ったら、健三は悲観的に「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起こった事は何時迄も続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ。」(201章)と答えた。「門」という小説の結びにも同じような感じがあると思う。主人公の妻が「本当に有り難いわね。漸くの事春になって」と云って、晴れぐしい眉を張って」という時、主人公は「うん、しかし又じき冬になるよ」(23章)と答えた。夏目はこのさみしさを免れる不可能性をよく表した。「愛の絶対的必要性を痛切に感じている」と書いても、「こころ」と同じように愛の不可能性が書いてある。夏目の「道草」を書く動機は分かりにくい

(2)

が、たぶん自分の寂しさと人間関係を分かろうとしていたがっていたかも知れない。その上、何か大切な仕事をしたがっていた。教師の時の夏目は本当にそのような感じを持っていたみたい。「経済に余裕のないのと、遂に何事も仕出かさないのとは、何処迄行っても変わりがなさそうに見えた。彼は金持ちになるか、偉くなるか、二のうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなった。」(57章)

志賀の事を考えれば、動機がもつとはつきり見えると思う。一つの理由は問題があったら、その問題について書けば、問題が分かる可能性があるという理由である。例えば、謙作の結婚の計画は愛子の家族に拒絶された時、主人公はそれに対して書く気がした。「彼は書いて見る事で多少でも此事がらを明瞭さす事が出来るだろうと考えた。」(5章) 志賀は自分の感情を使って、書くのは当然だと思っていたらしい。主人公は栄花の事を考えて、怒るようになったので、文章の材料になるかと思った。「彼は変に苛々して来た。そして不図其時、「ああ、これは書く事が出来る。」と思った。」(11章)

志賀は二つの目標がありそうである。自分自身がよく分かりたがっていた。それと文学を作りたがっていた。「暗夜行路」からそれが把握できると思う。「僕は知ったが為に一層仕事に対する執着を強くする事が出来ます。それが僕にとって唯一の血路です。其処に頼って打克つより仕方ありません。それが一掌両得の道です。」(7章) それは人間として、志賀の目標だけれど、芸術家として、思想はちょっと違うと言えいいと思う。「暗夜行路」の中で、謙作が芸術家の理想をはつきり述べている。「彼は自分のこれからやらねばならぬ仕事一人類の進むべき路へ目標を置いて行く仕事—それが芸術家の仕事であると思っている。」(13章)

「道草」で、夏目はその時の自分の夫婦生活を示している。この関係はそんなによくない事を言わなくてもいい。健三は妻を親切に扱いたくても、出来ないようである。普通に主人公は妻を厳しく扱っているけれど、妻が病気になったら、主人公の態度が変わる。そのような時しか、内面の感情を示せるようである。「然し大抵の場合には其不安の上に、より大きいなる慈愛の雲が靄鬱している。彼は心配よりも可哀想になった。弱い憐れなものの前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取った。細君も嬉しそうな顔をした。」(78章) 問題があるところは健三の傲慢な態度である。当時の夫が妻より優れているという考えを持っている。「自分は自分の為に生きて行かなければならないという主義を実現したがりにながら、夫の為にのみ存在

する妻を最初から仮定してはばからなかった。」(71章) 健三はいつも妻を馬鹿にしているけれど、妻を何か教えようとする事が出来ない。妻がお願いしても、主人公は断った。「じゃ貴夫が教えて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」と妻が言ったら、「お前の方に教えて貰おうという気がないからさ。自分はもう是で一人前だという腹がああっじゃ、己にやどうする事も出来ないよ。」(84章) と主人が答えているのである。時々をういう喧嘩の休憩があるが、いつの間にかもう一度喧嘩が起こる可能性はいつもある。喧嘩しない時でも、夫婦の関係は寒いと思う。「彼等は斯くして円い輪の上をぐるぐる回って歩いた。そうしていくら疲れても気が付かなかった。健三は其輪の上にはたりと立ち留る事があった。彼の留る時は彼の激昂が静まる時に外ならなかった。細君は其輪の上で不図動かなくなる事があった。然し、細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融け出す時に限っていた。其時健三は漸く怒号を己めた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携えて談笑しながら、矢張り円い輪のを離れる訳に行かなかった。」(71章) そういう「輪」を離れる不可能性は健三のせいであろう。例えば、文章を書いて、原稿料を貰った時、自分の好きな通りに使った。「是等の物を買って調べた彼は毫も他人に就いて考えなかった。新しく生まれる子供さえ眼中になかった。自分より困っている人の生活などはてんから忘れていた。」(86章) それでも、健三は自分の事が分かることもある。彼の姉と比べると、「ことによると己の方が不人情に出来ているのかも知れない。」(86章) と承認した。どうして「道草」の主人公はそのように振る舞っているのか。

「自分恥分の為に生きて行かなければならないという主義」(71章) を実現したがっているけれど、平凡な生活に押し流されている。家族を支えるために、仕事が必要だけれども、健三は教師の仕事は嫌いである。いつも仕事で忙しいので、自分がしたい事をする暇はない。日常生活に巻き込まれているので、自由に生きてがっている。自分の事をする機会はめったにないので、あったら自由な感じで自分の好きな痛りに行っている。それで、お金を貰った時、自由に使いたかったのはある程度当然だと思う。それと同じように、自分の文章を書く機会がある時、「彼はただ筆の先に滴る面白い気分に駆られた。」(86章) 健三は家族が重荷だと思うようである。主人公は妻を両親の言えに追い出した時、もう一度自由を感じている。家族を全く忘れてしまった。「また昔のような書生生活に立ち帰れた自分を喜んだ。」

(4)

。彼は細君の事がかつて考えずにノートばかり作っていた。彼女の里へ顔を出そうのどうという気は丸で起こらなかった。彼女の病気に対する懸念も悉く消えてしまった。。彼の心は二人一所にいる時よりも遥かに平静であった。」(55章)

多分、子供の時代の影響はまだ残っていると思う。夏目も健三も子供の時、両親からあまり愛情を受けなかったので、大人になっても愛情を感じにくいと思う。「今迄と打って変わった父の此態度が、生の父に対する健三の愛情を根こぎにして枯らしつくした。」(91章) 健三は自分の子供も愛していないようである。「三番目の子才が器量好く育とうとは親の欲目にも思えなかった。「ああ云うものが続々生まれて来て、必意どうするんだろう。」枯れは親らしくもない感想を起こした。その中には、子供ばかりではない、斯ういう自分や自分の細君なども、必意どうするんだろうという意味もおぼろげに交っている。」(81章) 夏目は家族がいても、寂しさを敏感に感じているみたいであろう。

「暗夜行路」を読んで、時任謙作は健三と同じような仕事やお金などの問題は全くない。しかしながら、直子との結婚まで、健三のような寂しさを感じていたようである。謙作は妻と子供があったら、安心出来ると妙に感じていたと思う。売春婦に行った時、「女のふつくらとした重味のある乳房を柔らかく握って見て、言いよのない快感を感じた。。

。兎に角それは枯れの空慮を満たして呉れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴として枯れには感ぜられるのであった。」(14章) それで、その乳房は大切な象徴だと思う。母から貰わなかった愛情を妻から妻から貰いたがっているかも知れない。その上、乳房というのは赤ちゃんと母を考えさせるであろう。生むということだったら、大自然との関係もあると思えばいいであろう。主人公はそういうものに心ひそかに憧れていると思う。

そういうそとだったら、結婚の後主人公が嬉しいというのは当然であろう。「謙作夫婦の衣笠村の生活は至極なだらかに、そして平和に楽しく過ぎた。」(16章) 謙作は妻に愛情を示しやすうだけれども、赤ちゃんについて親の感じが起こりにくいようである。謙作も子供の時代、自分の両親からの愛情を経験しなかったので、それが元理由なのか分からない。

健三と同じように、赤ちゃんが生まれたところ、親の感覚より、赤ちゃんの様子
の心配を感じた。「これが本統に変でなくなるかね」謙作には父らしいと云える

ような感情は殆ど湧いてこなかった。」(17章) それにしても、謙作は懂れているのを見つけたようだけれども、赤ちゃんの息子が死んでしまったら、前の不幸が戻った。「その子が丹毒で永く苦しんで死ぬと云うのも自分の子にだけ与えられた不幸ではない、それは分かって居るが、只、自分は今までの暗い路をたどって来た自分から、新しいもっと明るい生活に転生しようと願い、その曙光を見たと思った出鼻に、初児の誕生と云う、喜びであるべき事を逆にとつて、又、自分を苦しめて来る、」(19章) その上、妻の「過失」の後、夫婦生活は堪えられなくなってしまった。主人公は妻を許そうと思っていたけれども、しにくくなった。もう許したと主人公が言っても、心の中では許せなかったのである。女の人が誤ったら、いつまでも苦しめられるのは大変な事だと主人公が思っても、妻を許したくても、許せない。「蝮のお政と栄花と比べると、謙作は謝っていない栄花の態度の方が好きである。自分の妻を許すのは主人公の理想の行動だけれども、理想と現実の間にすきまがある。「今、お前がいったように寛大な俺の考えと、寛大でない俺の感情とが、ピッタリ一つになって呉れさえすれば、何も枯れも問題はないんだ。」(10章) それをする為に山の旅に出掛ける。

「道草」の主人公も理想的な生活の必要性を痛切に感じているけれども、彼は理想の不可能性も感じているようである。「彼は自分に不自然な冷かさに対して腹立たしい程の苦痛を感じていた。」(21章)

健三は我がまま者に見えても、寛大の面もあるに違いない。彼は姉にお金を出しているが、その上、お金を出さなくてもいい島田にも御常ねもお金を出していた。個人主義者の健三にはこういう家族の責任はさすがに重荷であろう。お金を儲ける義務があるので、自分がやりたいことが出来ない。それで、欲求不満がいっぱいになって来たと思う。目標を達することが出来ない感じがあるので、日常生活は籠の中に閉じ込められたようであったろう。「健三の新たに求めた余分の死後とは、彼の学問なり教育なりに取って、さして困難のものではなかった。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭った。無意味に暇を潰すという事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きているうちに、何か為終せる、又仕終せなければならぬと考える男であった。」(21章)

彼は大自然を見ても、慰めを貰うことが出来ない程、人口的な日常生活に徹底的に巻き込まれていた。「冬木立と荒に畠、藁葺屋根と細い流、そんなものが盆槍し

(6)

た彼の眼に入った。然し彼は此可憐な自然に対してももう感興を失っていた。」（101章）

「暗夜行路」の主人公は大自然の影響で、妻との関係について、理想を実現出来るようになった。「彼は自分の精神も肉体も、今、此大きな自然の中に溶込んで行くのを感じた。それに還元される感じが言葉に表現出来ない程の快さであった。」

（19章）その経験の後で、謙作は本当に妻を許したようである。直子が大山に行くと、それが主人公の表情だけで分かって来た。「謙作は黙って、直子の顔を、眼で撫でまわすように只見ている。それは直子には、未だ嘗て何人にも見た事のない、柔らかな、愛情に満ちた眼差に思われた。」（20章）主人公はついに行路の行き先に到着したらしい。

「道草」を「暗夜行路」の主人公の妻たちは女性と自然の関係をある程度、説明していると思う。女性は生むので、男性より大自然に近い事が出来るというのに健三も謙作も気が付いた。「芭蕉に実が結ると翌年から其幹は枯れて仕舞う。竹も同じ事である。動物のうちには子を生む為に生きているのか、死ぬ為に子を生むのか触らないものが幾何でもある。人間も緩慢ながらそれに準じた法則に矢ツ張支配されている。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を与えた。」

（93章）と健三が考えた。謙作も父の感情が起こらなくても、「直子の方はもう本当に母親になり切っていた。」（18章）赤ちゃんについて、二人の父親は妻の自信を少し羨ましそうに見ていると思う。二人とも自分の赤ちゃんを抱くことはない。謙作は「何か危つかしい感じで、抱いて見たいとも思わなかった。」（18章）健三もその気はない、「何だか抱くと剣呑だからさ。頸でも折ると大変だからね。」

（85章）二人の母にはそういう不安は全くない。直子は「乳の時間が来て、寝ながらそれをやっている時の様子などには如何にも落ち着きがあった。」（18章）健三の妻も同じようである、「彼女はぐたぐたして手応へのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、」（93章）

二人の主人公は赤ちゃんを生むことが出来なくても、何か自分の死後生きるものを残したがっていると思う。

この二冊の小説の題名は意味深長だと思う。「道草」という題名は「道草を食う」という慣用語句として、使われたら、時間を無駄にする意味になる。そういう意味は適当だと思う。健三は大切な仕事をする暇がないのである。しかしながら、も

った深い意味もあるであろう。夏目の内密の生活は道端の雑草と同じように、常痛の人々の生活から離れていた。自分の中にはいつも寂しい個人として暮らしていたかも知れない。彼は命と文学における目標に向かっている道路に乗れないイメージもあると思う。「門」の主人公も同じような感じがした。「彼自分は長く門外に佇立むべき運命をもって生まれて来たものらしかった。彼は門を通る人ではなかった。又門を下に立ちすくんで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」(21章)夏目自身は人生の日暮れまで、本を書いていた。終わりまで、何かを探していたか、待っていたか、分からない。

「暗夜行路」の末尾では謙作は道の行き先に達した感じがするであろう。志賀は問題が何かあれば、それについて書いたから、仮の安心が出来たであろう。その上、生活の危機は書く動機になる。生活が楽になったら、書く理由はあまりないというのは、「暗夜行路」から、はっきり分かると思う。「平和に楽しくと云う意味が時に安逸に堕ちる時に謙作は変な淋しさに襲われた。そう云う時、彼は仕事をよく思った。然し彼にはまとまった仕事は何も出来なかった。」「暗夜行路」を書いた後、志賀はほとんど小説を書くのを止めた。この本で目標を達したかも知れない。たぶん、その後、楽しく暮らすことが出来ていたであろう。問題があれば、解く力があるようになったので、書く必要はなくなってしまったであろう。「暗夜行路」の主人公は終わりに平気でも、すごく弱い状態で死に近く見える。作家として、志賀の象徴になると思う。志賀は文学にも人生にも成功出来たに違いないであろう。